

聖書：エペソ4：1－3

タイトル：「御霊の一致を保つ」

2017年最初の MJCC 礼拝で導かれたのは、エペソ人への手紙4：1－3です。

この「エペソ人への手紙」を記した著者は使徒パウロという人物です。

彼は、イエス・キリストを信じてクリスチャンとなる前は、教会に入ってクリスチャンたちを引っ張り出して、ユダヤ教の祭司たちの元に連れて行き、クリスチャンたちを死刑に処するほどの迫害をしていました。

パウロが、なぜそれほどまでにクリスチャンたちを迫害していたのかと言えば、彼がこれまで熱心に教えられ、そして信じてきたユダヤ教の教えがあったからです。

聖書によれば、「私は…多くの者達に比べ、はるかにユダヤ教に進んでおり、先祖からの伝承に人一倍熱心でした。(ガラ 1:14)」とあります。また「すべての人に尊敬されている律法学者(の)ガマリエル(使徒 5:34)」「のもとで…先祖の律法について厳格な教育を受け(使徒 22:3)」た。と記されています。

この様にパウロはユダヤ教の律法学者の中でも人一倍熱心で、その知識においては抜きん出た人物でありました。

だからこそ、その律法に背いていると思えたクリスチャンたちを、パウロはじめユダヤ教の人々は赦しておけなかったわけです。

そしてそれが迫害へとつながりました。

けれども、そんなパウロに、突然、天からの声として主イエスが直接「彼の行っていることが間違いである」ことを指摘しました。そのことが使徒の働き9章に記されています。

以来、パウロはこの出来事を通して、主イエス・キリストを信じクリスチャンへと生まれ変わりました。クリスチャンとして生まれ変わったパウロは、自分がこれまで教えられてきた律法解釈とは、実に知識面だけのものであったことを知り、実際に律法を与えてくださった神ご自身の御旨をことごとく見誤っていることに彼は気付きました。

そして今度は、正しい解釈を持って律法を理解し、彼は全人類に与えられている神の御計画とまた神の御思いというものをご正確にその書簡の中に残すことができました。この「エペソ人への手紙」もまさしくその書簡の一つですが、パウロはその豊富な聖書知識をもって、はじめの1-3章までの中で、神の驚くべき救いの御計画とまた神の永遠の選び、そしてイエス・キリストによる罪の贖いと救い、さらに御国を受け継ぐことなどを記し、クリスチャンとは一体何をどのように信じているのかという「教理」の部分を先に記しました。

これは私達クリスチャンが、実践があつて教理を当てはめるのではなく、神の教えを理解してこそ、つぎに実践が来るためです。

生活があつて信仰が後から付いてくるものではありません。信仰があるから生活に反映されて行きます。

さて、パウロはこの4章に来て、「さて」という言葉から始めていますが、この言葉は「さて」というより、「それで・そういうわけで」と訳す言葉です。つまり、この言葉はこれまでの前の文章を引き継いで話が始まっています。

すなわち、1-3章に記されていた主な内容である、神の驚くべき救いの御計画とまた神の永遠の昔からという遠大な中での選び、そしてイエス・キリストによる罪の贖いと救い、さらにクリスチャンは神の御国を受け継ぐ者であるということなどなどの中に入れられている者であるので、「そういうわけで、……召されたあなた方はその召しにふさわしく歩みなさい。(エペソ4:1)」と、勧められています。

ここに記されている「召し」という言葉は、実際には二つの別々の言葉です。先の言葉が「召命」という言葉で、後の言葉は「招かれる、呼び出される」という意味です。聖書の中では、この神に呼び出された者たちの集まりのことを「エクレシア・教会」と呼んでいます。

召された者とはまさしく「神によってこの世からキリストの身体である教会に呼び集められた者」たちのことです。そしてその目的は、「神の御国の一員として神の栄光のために、神の栄光を映し出して生きること」です。

大事なのは、「召し、招いて、呼び集めてくださった方に従って生きる」ということです。自分勝手に自分が王様となり自分の王国をつくってははいけません。

パウロはそのことを悟らせるかのように、自らのことを「主の囚人」と記しました。

「囚人」とは捕らわれの身のことです。一般的には決して良くない表現と言えますが、パウロはあえて「自分は主に捕らえられている「囚人」である」と、記すことで、クリスチャンとは徹底的に「主に捕らえられ呼び集められた主に服従する者」であるということを悟らせたかったのでしょう。

この主に服従し、主に従って生きるクリスチャンの歩みについて、先週の元旦礼拝でもグラント師がエペソ書とピリピ書の中から、このようにメッセージしてくださいました。一部抜粋してご紹介したいと思います。

「新しい完全な世界での永遠のいのちという私たちの希望は、当然私たちに非常に良い影響を与えます。しかし、それは私たちが中心なのではありません。これを正しく理解することはとても大切です。私たちが住む社会は、ますます人が自分のことばかり考えるようになっていきます。私たちはますます自分勝手になっています。ある調査で、過去200年間に出版された150万冊の本に使われた言葉が分析されました。その中で、使用される頻度が圧倒的に増えた単語は「得る」と「自己」でした。反対に極端に減ったのは「与える」と「従う」でした。この結果は、ますます物質主義と自己中心になっている社会を反映しています。しかし、新しい完全な世界での永遠のいのちという私たちの希望は100%イエス様中心であることを理解しなければなりません。」

また他の箇所では、

「私たちの考えや行動は、自分が何をしたいかによるのではなく、イエス様が私にどうしてほしいと望んでおられるかによるのです。全てにおいて一仕事、勉強、家庭生活、娯楽、祈り、奉仕—私たちはいつもイエス様が崇められ、栄光を受けられるように努めるべきです。私たちの優先順位のトップにイエス様を持ってくださるだけでなく、イエス様の優先順位が私たちの優先順位にならなければなりません。」

と御言葉を取り継いでくださいました。

これは非常に重要なことです。

自分が思い描くイエス様像ではなく、イエス様に服従して従う歩みをする者が「召された者のふさわしい歩み」ということです。

私達がこの中で忘れてはならないのは、なぜそこまでして神に召された私達クリスチャンは神に従おうとするのかということです。

これが分からなくなると従うことが苦痛になり、恵みを見失います。

ですから、神の御業とその恵みに私達は絶えず目を留めていなければなりません。

それは、イエス様の十字架の犠牲という驚くべき恵みです。そしてそれを通して、私達に与えられた祝福があまりにも素晴らしくて、またあまりにも豊かで喜びに満ちていて、なんとも言葉に言い表し尽くすことが出来ない、あふれる感謝がそこにはいつも涸れることのない泉として溢れてきます。その神の無限の溢れる愛が私達の胸に迫るゆえに、私たちは、この「神に従いたい!」、そして「神の御心に叶う歩みをしたい!」と思わされ、願わされ、そして具体的な信仰の行動が生み出されていくのではないのでしょうか。これこそが召された者に与えられた服従できる恵みの歩みです。だからこそ、私たちは神に従うわけです。

パウロは、この神に召され、神への感謝が溢れて神に従う信仰者への勧めとして、2、3 vでさらに4つの具体的な勧めをしています。

まず一つ目は「謙遜」ということです。

これはピリピの2章に記されている「キリストは神の御姿であるのに人間の姿を取り天から降りてきた」ということから意味するものですが、言い換えれば「へりくだり」とも言えます。

また新約聖書以前では唯一、旧約聖書のギリシャ語訳である70人訳で、イザヤ書66:2にある「わたしが目を留める者は、へりくだって心砕かれ、わたしのことばにおののく者だ」というところに記されています。

これらのことから、「謙遜」とは、イエス様のように「自分を無にし、へりくだって、神のことばにおののき従い、仕える者のこと」と言えます。

私達がイエス様のように本当の「謙遜」を身につけるためには、まず自分の名誉を捨てなければなりません。つまり私とは人であって神ではなく、あくまで神によって造られた存在にすぎないということを、わきまえ知る必要があります。時に私達は、自分は何か偉い者のひとりであるかのように勘違いしてしまうことがあります。例えば世界で日本人は素晴らしいなどと賞賛されるできごとがあると、日本人の多くがなんだか自分のことのように思うことがあるかもしれません。私達はわずかな自分の能力を誇らず、むしろパウロのように自分の弱さや罪深さを知る必要があります。なぜなら自分の弱さや罪深さを知るならば、決して誰も誇ることはできないからです。そうしてただただ神により頼まなければならない存在であること、また神の御言葉の前にへりくだり、おののき従うものであることを知らされていきます。それが聖書の言うところの「謙遜」ということです。

第二は「柔和」ということです。

これは一般的に「優しい」と訳すことができる言葉です。神と人との両方に対する言葉です。「優しい」と言っても、すべてのことに対して何にでも「優しい」ということではありません。例えば不正や他の人への不当なことがあった場合にはきちんとそのことを指摘することを含みます。そしてさらには、訓練され、飼いなされたという動物に対する意味を含んでいる言葉のようです。これらは、自分の本能や情熱や思い通りの行動を制御するという「自制」と同義語となる言葉です。つまり「柔和」とは、ふさわしい時には指摘をするが、そうでないときは、感情や自らの考えをきちんと制御し自制することを意味し

ています。

私達クリスチャンの場合、神の御名が汚される時にはきちんと指摘する必要があります。しかし自分に対して不当なことがあった場合は、感情や自分の考えを押し出すのではなく、自制してそれを受け止めることが必要ということでしょう。このこともまた生まれながらの私達には不可能と言えるほど難しいことです。ですから神により頼まなければ成しえないことと言えます。

第三に、「寛容」ということです。この言葉は時に不幸や苦しみをびくともしないで耐えるという意味でつかわれるようですが、さらには悪に対する復讐を遅らせること、または傷つけられても攻撃しないということも含みます。そしてそれは何より人間に対する神の忍耐（耐える）を意味しており、クリスチャンにはこの神の寛容な忍耐をもって、傷つけられても悪を行われても神を信頼し、耐えるということが望まれていると言えます。言い換えれば、神を信頼するからこそ耐えることができると言えます。寛容もまた自分からは生まれて来ず、神を信頼するところから与えられるものと言えます。

最後の第四は「愛」です。

ここではさらに「忍び合いなさい」と記されています。

「忍び合う」とは忍耐ということですが、先ほどの「寛容」はどちらかと言えば耐えるということでした。しかしこの忍耐はもっと具体的に「赦す」ということです。そして、ここに記されている「愛」こそ「アガペー」の「愛」です。

この「愛(アガペー)」は、単に「好き・好む」と言った感情を主体としたものではなく、知性と意志を含んだものです。「好き・好む」といった愛は、ほとんどが自分にとって都合がよい人を愛する愛で、自分に好意を寄せてくれる人、あるいは自分が好意を寄せている人にだけに表す愛です。それには何らかの利益が伴っていたりして、多くの場合は肉体的です。ですから自分にとって気に入らなくなると途端に態度を変えることがあります。

しかしアガペーの愛は、敵をも愛する愛で、まさしく神しか持つておられない無償の愛です。いかなる時も、また何によっても決して奪うことも失うことも、無くなることもない永遠の愛です。

この「愛 (アガペー)」こそが、神から人に与えられている「愛(アガペー)」です。

私達クリスチャンはこの「愛(アガペー)」が分かるからこそ互いに神の「愛(アガペー)」をもって(いただいて)忍び合う、すなわちどんな状況になったとしても「赦し」合うことができる者達であるということです。

パウロは、エペソのクリスチャンたちに対して、神に選ばれ召された者として、そのような謙遜と柔和と寛容とそしてアガペーの愛をもって互いに忍び合い・赦し合うようにと勧めています。全ては神を信じる信仰によって与えられていくものです。

そしてそこから当然生み出されてくる「平和」という絆でさらに結ばれなさいと、勧めています。

「平和」とは聖書でいうところの「神との和解」を意味しています。キリスト者たちの間にはアガペーの愛と共に互いに赦し合い和解し合うことが、神と人と互いの間になければなりません。

そしてこれらすべてを成しうるために、無くてはならないものというのが、「御霊の一致」ということです。

御霊とは、聖霊とも言います。目には見えませんが、三位一体なる神の一位格です。このお方は、私達が

「ある」とか「ない」とか議論する以前に存在されているお方です。ですから、ここで言われている「御霊の一致を熱心に保ちなさい」とは、非常に変な言い方といえます。なぜなら御霊なる神は私達が熱心に保たなくとも存在しておられるお方だからです。しかしそれにもかかわらず、パウロは「熱心に保つ」ようにと勧めています。

それは、私達クリスチャンが、むしろ御霊の存在を無視して、教会内で一致を妨げる働きを互いに行ってしまう危険性がいつもそこら中に容易にあるからだと言えます。

「熱心に保つ」とは、「熱心な努力と配慮」という意味があります。それを怠らずに続けなさいとパウロは勧めています。

そして何より教会に一致を与えてくださるのはやはり御霊・聖霊です。

この御霊を無視しているところに、一致はありません。神に従うのではなく、自己主張と自己中心が教会内に溢れているときには、教会の交わりは冷え切り、命の無いものようになってしまいます。それこそサタンの喜ぶところですよ。

しかし私達がキリストの十字架を見上げ、神が与えてくださった召し従い、アガペーの愛を見つめて離れず、互いに赦し合い熱心に御霊の一致を求めていくなれば、いったい誰が敵対できるのでしょうか。

そして御霊は私達に神の知恵と真理を教えてください。

イエス様は御霊について次のように弟子たちに教えました。

「ヨハ 14:26 しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。」と。

すなわち、御霊は神のことばを教え、さらに話した(御言葉)ことを思い起こさせ(思い出させ) くださるのです。ですから、私たちに御言葉の蓄えがないならば、思い起こす(思い出す)ことが出来ないということですよ。

御言葉が自分の内に無い時は、自分の考えとその時の感情により頼むことになります。それこそが自己中心的で危険なことですよ。私達は神の真理を教え思い出させてくださる御霊が豊かに働くために御言葉を蓄える必要があるのです。

イエス様は、さらにこの後で弟子たちに、

「ヨハ 15:5 わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。」と教えられました。

私達も同じように、イエス様にとどまるなら実を結ぶことが出来ます。すなわちそれは、イエス様と同じ三位一体なる神の一人である御霊により頼み、御霊の一致を熱心に保つということとおなじことですよ。

私達は、キリストにとどまり＝御霊の一致を熱心に保たなければ、どんなに努力をしても何の実を結ぶこともできません。サタンに勝利を捧げてしまうことになります。

この2017年MJCCはなんとしてもアガペーの愛を持って互いに赦し合い、キリストにとどまり＝御霊の一致を熱心に保つ交わりとさせていただきたいと心から願われます。

そしてなによりそのことを願っているのは父なる神御自身ではないでしょうか！

最後に、パウロはなぜあれほど律法を間違っただけでなく、正しく理解することができるようになったのかというのは、それはまさしく「御霊の一致を熱心に保った」からにほかなりません。

主を愛し、主に仕え、召してくださるその召しにふさわしく歩むためには、なんとしても御霊の一致、キリストにとどまる、そして御言葉を蓄えるということが私達には必要です。神に召されている者として今年も共に皆様と歩ませていただきたいと思います。皆様の上に限りない神の祝福が豊かにありますように！！アーメン。